

## 世界最大の化学コミュニティの祭典 “PACIFICHEM2015”開催

5年に一度の世界化学界の一大イベントである環太平洋国際化学会議 2015 (The 2015 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies ; Pacificchem) が、2015年12月15日～20日の6日間、ハワイのホノルルで開催された。なお、初回の1984年の開催から数えて今回が第7回目の開催となる。

今回は“*Networking-Building Bridges across the Pacific*”のスローガンのもと、有機、無機、分析、高分子、物理化学等を含む、①**化学中核分野**をはじめ、②**学際領域**(農業、環境、地球化学、生物、材料、ナノサイエンス、ほか)、③**地球規模の問題解決に資する化学的アプローチ**(クリーンエネルギー、ストレージ、医学薬学、ヘルスケア、地域社会との連携)の3つの重点領域を定め、さらに11の分野に細目分類されたトピックごとに連日活発な講演が数多く行われた。現地で行われた講演総件数は16559件に上る。

### 過去最大規模の開催

2014年の募集期間に応募されたシンポジウムの数は334件(前回235件、42%増)で過去最大となり、各シンポジウムが行ったセッション数は1439セッション(前回1092セッション、32%増)に上った。また昨年2015年前半に行った講演募集への応募はすべてWebシステムで受領され、18070件の申込みがあった。さらに最終日時点で世界71カ国・地域からの参加者総数は15736名(前回

表 地域・国別講演申込数(100件以上)

地域	国名	申込数
アジア	日本	6992
	中国	1307
	韓国	1071
	台湾	211
	シンガポール	156
北南米	米国	4034
	カナダ	1050
欧州	ドイツ	459
	英国	320
	フランス	198
オセアニア	豪州	581
	NZ	101

12520名、26%増)となった(各国の参加状況は表を参照)。なお、講演数増加に伴い、講演会場は前回利用の3会場に4つのオフィシャルホテルを加え、計7会場で講演を行った。

PACIFICHEM 2015 期間中には各会場間を巡回するシャトルバスが、ホノルル市内に点在する21のオフィシャルホテルに滞在する15700余名の参加者の主な交通手段となった。今回はシャトルバス増発で参加者の利便性向上に努めたため、期間中大きな混雑は生じず、スムーズな運行となったかと思う。

### 運営母体について

Pacificchem は7カ国の化学会が共同主催して5年ごとに開催する国際会議であり、アメリカ、カナダ、日本が設立化学会として、またオーストラリア、ニュージーランド、韓国、中国が共同主催の化



写真1 開会式の様子

学会として Pacificchem の開催に関与している。さらに、2014年には設立化学会である日米加の化学会合意のもと Pacificchem 法人を設立し、将来にわたり安全に安定して Pacificchem を開催できる組織づくりを行った。なお、今回のホスト学会は米国化学会であり、Peter J. Stang 教授(ユタ大学)が組織委員長を務めた。日本からは、中村栄一教授(東大)が副組織委員長を務め、山内薫教授(東大)、高原淳教授(九大)、北川宏教授(京大)、川島信之常務理事(日本化学会)が国際組織委員として参画し運営にあたった。またこのほかに、環太平洋地域の約50の化学関連団体(日本からは31学協会が参加)が Official Participating Organization : OPO として Pacificchem に参加し、会の成功に貢献した。

### 会期中の出来事

開催前日12月14日には現地参加登録会場がオープンし、大勢の宿泊者を有する Hilton Hawaiian Village の登録会場には長蛇の列ができ、手続きに30分以上

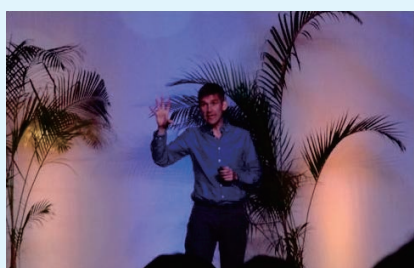


写真2 基調講演を行う Sam Kean 氏

要するケースがあった。これに対し Hawaii Convention Center を含むその他の登録会場では、一時的な混雑はあったものの、前回に比較して比較的スムーズに手続きが進んだかと思う。

初日 12 月 15 日正午からの学生ポスター賞最終選考のため登録を 11 時から開始した。これまでの 2 回の予備選考で 2000 人超の候補者から選ばれた 353 名の Finalist のチェックイン手続きも 10 分以上待たせることなくスムーズであった。一方で、1 つのポスター講演につき 2 名のジャッジが審査することになっていたが、ジャッジが指定時刻に遅れたり担当の審査終了前に退出してしまい、2 時間を経過しても 2 人目の審査を待たされ続ける学生が大勢会場に残っていた。次回の改善項目である。なお、審査員からは日本人学生の英語レベルが格段に向上し、講演内容の質も質疑応答の対応もポスター講演とは思えないほどであったとの感想が多々聴かれた。厳選な審査の結果、受賞者 60 名が選定され、うち 1/3 は日本人学生が受賞した。受賞者は 18 日の授賞昼食会に招待され、Peter Stang 組

織委員長から賞状が授与された。15 日 18 時からの開会式には榊原定征会長も出席し、サイエンスライターの Sam Kean 氏のプレナリー講演を聴講した。レセプションには約 3000 名が参加し盛大に開幕を祝した (写真 1, 2)。

会期 2 日以降最終日までは順調に各講演会場でセッションが開催された。

12 月 17 日には本会発行の英文誌 CL と BCSJ の合同編集委員会を開催した。米国、ドイツ、中国、韓国の編集委員も参加し国際的なリーディングジャーナルを目指すことを確認した。

最終日の 12 月 20 日、閉会式が 14 時から開催された。

なお、閉会式は今回初の試みであり、最終日にどの程度の参加が見込めるのかなど不安要素もあったが、結果としては 650 名以上が参加して最後のイベントを盛り上げた。

### 化学オーケストラの協演

今回は日本発の有志化学者オーケストラ Orchestra Chimca (代表: 岩岡道夫・東海大教授) のメンバーが事前に Pacificchem 参加者に協演の呼びかけを行い、現地で初顔合わせ、直前にリハーサルを行うなど準備を進め、16 日夜のポスター講演中に演奏を披露したり、学生ポスター賞の授賞昼食会でもなじみ深い室内管弦楽の曲目で出席者の耳を楽しませた。閉会式が最後の演奏の機会となったが、指揮者の宮野谷義傑氏が帰国後であった



写真3 化学オーケストラの様子 (指揮者は根岸英一先生)

ため、フルート演奏で参加した中村栄一組織委員会副委員長の計らいで、音楽にも造詣の深い根岸英一先生にタクトを振っていただくという予期せぬ素晴らしいアレンジがあった (写真 3)。今後継続して行うイベントにしたいとの称賛の声が多数あがった。

### おわりに

次回 2020 年は本会がホストを務める。今回は次回ホスト開催のための恰好の勉強の場となった。

また、本会では重点項目“化学会のグローバル化”の一環として年会の英語化を推進している。英語での講演は、世界の研究者に向けて自らの研究成果を共有する第一歩になるかと思う。是非年会での英語講演に積極的に取り組んでいただき、グローバルな成果発表の場として本会年会を有効に活用していただきたい。

[中村史夫 (日本化学会企画部)]

© 2016 The Chemical Society of Japan